

論文

アク・ベシム遺跡出土「杜懷寶碑」再読

—大雲寺との関わりをめぐって—

齊藤茂雄*

※ 帝京大学文化財研究所

はじめに

I. 先行研究の整理

II. 「杜懷寶碑」再読

III. 「杜懷寶碑」と大雲寺

おわりに

はじめに

キルギス共和国トクモク市にあるアク・ベシム遺跡は、現在帝京大学を中心に発掘調査が連年行われている。この遺跡が、ソグド人の作ったオアシス都市であるスイアブ（第1シャフリスタン）と、唐の安西四鎮のひとつである碎葉鎮城（第2シャフリスタン）であることはもはや疑いなく、筆者を含めた先行研究もまた、その前提で碎葉と周辺地域の歴史復元を行ってきた。¹⁾

とはいえ、アク・ベシム遺跡が歴史上のどの遺跡に比定されるのか、長らく論争が続いてきた。最初にこの遺跡について論じたバルトリドは、この遺跡を11～12世紀のカラハン朝・カラキタイの都であるバラサゲンである可能性を示唆した [Бартольд 1966 (1897), pp. 56-57]。この説を受けて、最初にこの遺跡を発掘したベルンシュタムもまた、アク・ベシム遺跡はバラサゲンであると考えていた [Бернштам 1950]²⁾。しかし、後に発掘調査を行ったクズラソフ [Кызласов 1959, pp. 235-237] は、この遺跡が11～12世紀まで存続していないことを指摘し、バラサゲン説を否定したのである³⁾。このクズラソフによる調査結果を受けて、文献学の立場からアク・ベシム遺跡をスイアブ（碎葉）に比定したのはクローソンであった [Clauson 1961]⁴⁾。スイアブは、チュー河流域に入植したソグド人によって建設された都市で、唐の安西四鎮のひとつ、碎葉鎮が置かれたことで著名な都市である。さらに、この説は張広達 [2008 (1979)] がより多くの傍証を博捜することで補強されたのである。

アク・ベシム遺跡=スイアブ説は、蓋然性が高い説ではあったが、確証があったわけではない。クロー

ソンがトクモクという地名を見だし、重要な根拠として提示した突騎施コイン第二形式の銘文でさえも、現在ではその読みが否定されているのである [吉田2021]。そのクローソンのスイアブ説を確実なものとした重要な出土文献史料こそが、本稿で扱う「杜懷寶碑」である。この銘文中に、「碎葉」という地名と、7世紀後半に碎葉鎮に赴任したことが漢籍史料中から確認できる「杜懷寶」の名が見いだされたことにより、スイアブ説は鉄案となったのである。

以上の一点だけ取り上げても重要な史料である「杜懷寶碑」は、これまで内藤 [1997]・周偉洲 [2000] をはじめ、多くの先行研究によって検討が行われ、その歴史的背景が明らかにされてきた。しかし、その録文自体は、内藤論文以来、ほとんど更新されず、ようやく2010年代半ば以降、実見調査による検討が加えられるようになったところである。そのため、この碑文が作られたそもそもの性格である、「造像銘」としてこの碑文を釈読する試みは、まだ行われたことがない。

「造像銘」とは、仏像を作成した際に、その仏像を作成した動機（多くは、仏像を作成することによって得られる功德が目的となる）や、作成に関わった人物などを記した銘文であり、北朝期以降、仏教の隆盛とともに非常に多くの造像銘が中国各地に作られるようになる。本稿で扱う「杜懷寶碑」もまた、現在は失われているものの、上部に一仏二菩薩像を伴う造像銘であったと考えられる [森2020, p. 174, n. 22]。造像銘は、各地に多くの作例があるが、定型句を用いた類似の表現が多い。

「杜懷寶碑」が作成された7世紀後半期の造像銘としては、洛陽の龍門石窟に多くの作例があり、幸運なことに、それらは『龍門石窟碑刻題記彙録』⁵⁾によ

りまとまった史料集として提供されている。そこで筆者は、『彙録』に収集された用例に基づき造像銘の定型句を拾い上げた上で、キルギス共和国ビシュケク市にあるスラブ大学の展示室で「杜懷寶碑」の実見調査を行い、本碑文の文献学的な再読を試みた。その結果、これまで判読されていなかった何文字かを新たに読み取ることができた。

これによってようやく、造像銘として「杜懷寶碑」全体の文脈をつかむことができるようになった。この再読の結果は、齊藤 [2023, p. 30] に録文だけ掲載したが、紙幅の関係で十分な検討を行うことができなかった。本稿では、まず「杜懷寶碑」に関わる先行研究を網羅したうえで、「杜懷寶碑」の新たな録文を提示し、語注を付した訳注を提示する。さらに、「杜懷寶碑」の造像銘としての性格を踏まえた上で、碎葉城にかつて存在していた大雲寺との関係について、私見を述べてみたい。

I. 先行研究の整理

本碑文についての最初の報告は、1996年のゴリャチェワとペレグドワの論文 [Горячева / Перегдова 1996, pp. 185-187] において提出された。しかし、その時点ですでに発見から10年以上が経過していた。当該論文によると、本碑文は1982年に地元の水官（ミーラーブ）によってアク・ベシム遺跡のいずれかの地点から発見され、科学アカデミーに収容されたという。本碑文の解読については中国学者のスプルネンコ（Г.П. Супруненко）氏が担っており、氏は、スイアブのことである「碎葉」と、その司令官として「杜懷寶」の名を読み取り、アク・ベシム遺跡の「東方の拡張部」（現在で言う第2シャフリスタン）が、唐の建設によるものであることを示唆した。こうして、クローソンが提唱したスイアブ＝アク・ベシム遺跡説が文字史料によって証明されることとなった。

とはいえ、スプルネンコ氏は「杜懷寶碑」を正確に読解できたとは考えにくい。当該論文では、スイアブの司令官だった杜懷寶が「十姓」突厥を打倒した記念で仏寺を建て、菩薩像（すなわち「杜懷寶碑」）を作った、という現在では到底受け入れがたいストーリーが展開されている。そのうえ、碑文の録文も写真も無く、他の研究者が検証することができない不完全なものであった。

このゴリャチェワ・ペレグドワ論文の翌年には、早くも内藤 [1997] が刊行された。ここで、初めて録文と和訳が提示され、同時に碑文の写真も提供された。下に、内藤 [1997, p. 151] の作成した録文を提示する。⁶⁾

1. [安] 西 副 都
2. [護] 碎 葉 鎮 壓
3. 十 姓 使 上 柱 國
4. 杜 懷 [寶] ○ 上 為
5. 天 下
6. ○ 妣
7. 見 使 ○
8. 法 界 生 晋
9. 願 平 安 獲 其
10. 暝 福 敬 造 一 佛
11. 二 菩 薩

加えて、内藤氏はこの碑文が、下記の史料にある記述と関係するものであることを指摘した。

『張説集校注』卷一六「唐故夏州都督太原王公神道碑」 [pp. 774-775]（『文苑英華』卷九一三「碑七十神道三十二」 [pp. 4804-4805]；『全唐文』卷二二八「張説八」 [pp. 2302-2304]）

裴吏部、立名波斯、實取遮旬、偉公威厲、飛書薦請、詔為波斯軍副使兼安西都護、以都護杜懷寶為庭州刺史。公城碎葉、街郭迴互、夷夏縱觀、莫究端倪。三十六蕃承風調賀、自泊于海東肅如也。無何、詔公為庭州刺史、以波斯使領金山都護、前使杜懷寶更統安西、鎮守碎葉。朝廷始以鎮不寧蕃、故授公代寶。又以求不失鎮、復命寶代公。夫然、有以見諸蕃之心搖矣、於是車薄啜首唱寇兵、羣蕃響應、蝟毛而豎。公在磧西、捷無虛歲。蹙車薄於弓月、陷咽麪於熱海。勦叛徒三千於麾下、走烏鵲十萬於域外。

[和訳] 裴行儉は、名目を波斯（王子を本国に送ること）にもうけ、実際には李遮旬（と阿史那都支）を捕らえようとした時に、公（＝王方翼）の威厳を卓越したものと認め、上奏文を送って推薦し請願したので、詔を降して（公を）波斯軍副使兼安西都護とし、（安西）都護の杜懷寶を庭州刺史とした。公が碎葉城を築くと、街区と外城は曲がりくねり、蕃・漢の人々が全体を見渡そうとしたが、その端まで知り尽くすことはなかった。（漢代の西域三十六国に

比せられる)西域諸国は教化を受け入れ謁見して祝意を表したので、自然と東方の海域にいたるまで厳格に整ったのである。ほどなくして、公に詔を降して庭州刺史とし、波斯使として金山都護を兼任させると、前使の杜懷寶は再び安西(都護府)を統治し、碎葉鎮を鎮守した。朝廷は当初(すなわち、王方翼が碎葉城を築いたときの交代で、杜懷寶が)、鎮守したが蕃夷を安んじなかったため、公に(安西都護を)授けて杜懷寶と交代させた。さらに、碎葉鎮を失わないようにと求め、再び杜懷寶に命じて公と交代させた。さて、そうすると蕃夷の心が動揺するのを見ることとなり、そして(阿史那)車薄啜は侵攻のための兵士を真っ先に率いたところ、多くの蕃夷が呼応し、ハリネズミの毛(のように多くの蕃夷)が立ち上がったのである。公は西域にいて、連年勝利した。車薄を弓月(=現在の伊寧付近⁹⁾)で攻撃し、咽麴を熱海(=イシク・クル)で攻め落とした。反乱者三千人を軍旗の下に討伐し、烏鶻(部)十万人を領域外に追い払った。

この記述では、安西都護として現れる杜懷寶が、王方翼が阿史那都支の乱を鎮圧すると、王方翼と安西都護を交代して杜懷寶自身は庭州刺史となったこと(1度目の交代)、その後、王方翼は碎葉城を築くと、679(調露元)年末から680(調露二)年初頭に再び杜懷寶と交代して王方翼が庭州刺史となり、杜懷寶が碎葉城に赴任したこと(2度目の交代)、その後、阿史那車薄の乱が発生して王方翼が活躍したことを述べる。

内藤氏は、王方翼が1度目の交代をして679年に碎葉城(第2シャフリスタン)を築いた直後、翌年初頭までには杜懷寶と2度目の交代をしたと推定した。そして、杜懷寶が帯びている「碎葉鎮守使・鎮圧十姓使」という肩書きは、実は「碎葉鎮守使・鎮圧十姓使」の書き誤りであると主張した。碎葉鎮守使とは、その後、漢籍史料に現れる碎葉鎮の鎮将が帯びている肩書きであり、それを杜懷寶は帯びているはずと考えたためであった。さらに「十姓」という呼称は682(永淳元)年二月~七月の間に発生した、阿史那車薄の乱に際して初めて登場したと主張した。そして、「鎮圧十姓使」とは阿史那車薄の乱の鎮圧を担った約半年間の間だけ杜懷寶が帯びた使職であると考え、この約半年間に「杜懷寶碑」は作成されたとする説を提示した。

内藤論文によって録文・写真が提供され、さらに前年のうちに林[1996, p. 176]が初めて拓本写真を提供したが、これらは写真が小さく、拓本自体も不鮮明であったため、碑文の検証が十分行えるようになったとは言いがたかった。それゆえ、内藤氏によって作成された録文はほとんど検証されずに受け入れられることとなる。内藤論文はすぐに中国語に翻訳され[内藤/于志勇1998]、内藤論文を受けた周偉洲[2000]が発表された。その際、周偉洲氏の使用した録文は、内藤氏が作成したものをほぼそのまま受け入れたものであった。唯一、明らかな録文の誤りと考えられる8行目最終字のみ、内藤氏の起こした「晋」という文字を「普」に改めているが、この修正は、内藤論文の于志勇訳[1998, p. 102]の段階で既に行われているため、内藤氏本人による修正かもしれない。

そのほか、いくつか文意から補って推測された文字が付け加えられた。具体的には、5行目の「天」の下には「子」が推測されて「天子」という熟語が提案された。6行目の冒頭には「為」が入り、「上為」と「下為」という対応が推測された(その意味については後述)。6行目の末尾の「妣」の上には「考」が推測され、「考妣」(亡くなった父母)という熟語が想定された。どれも示唆に富む意見であったが、原碑を実見できない状況では推測にとどまざるを得なかった。意外なことではあるが、周偉洲によって初めてこの碑文が、仏像(この場合三尊像)を作成した際の功德を回向するための祈願文、いわゆる「造像銘」であることが明言された¹⁰⁾。

周論文は、内藤論文によって提案された2度目の交代による杜懷寶の碎葉赴任時期(679年末-680年初頭)については同意した。そのうえ、杜懷寶が王方翼と2度目の交代をしたのは、武則天が、廢后王氏の一族である王方翼を信任しなかったためではないか、とも指摘している。

しかし、周論文は、杜懷寶の持つ肩書きが「碎葉鎮守使・鎮圧十姓使」の書き誤りであるとする内藤説には疑問を呈した。いまだ碎葉鎮守使が設置されていた確証がないこと(確認できる初出は694(延載元)年二月の「碎葉鎮守使韓思忠」)、碑文中には脱誤がありそうにないこと、などがその理由である。これは至極当然の疑問で、書き誤りを疑うにはこの碑文はあまりにも短すぎる。この文の長さで書写の誤りに気がつかないとしたら、よほど書者は杜

撰だったことになろう。

さらに、周論文は「杜懷寶碑」の作成時期として内藤氏が提案した、682年二月～七月という期間にも疑問を呈している。すなわち、まさに阿史那車薄の乱が発生しているそのさなかに、鎮圧の渦中にあるはずの杜懷寶が、悠長に亡母の冥福を祈るため造像銘を作成することなど、あり得るだろうか、という疑問である。これももっともな疑問である。周偉洲が代わりの作成年代として提案したのは、杜懷寶が碎葉鎮に赴任した679/680年から、吐蕃によって安西四鎮が陥落し、唐軍が碎葉鎮からも撤退したと考えられる686（垂拱二）年までの間、という、最も穏当な説であった。

「杜懷寶碑」が阿史那車薄の乱と直接関係しない、という指摘から、周偉洲は碑文中で杜懷寶が帯びている肩書きである「碎葉鎮圧十姓使」についても、内藤氏とは異なる見解を提示している。すなわち、この肩書きは阿史那車薄の乱鎮圧に限定して解釈する必要はなく、広く西突厥十姓部落を鎮守することを目的とした暫定的な使職で、後に固定化されて「碎葉鎮守使」という肩書きに変化した、という見解である。

次に「杜懷寶碑」を検討したのはルボ=レスニチェンコ [Лубо-Лесниченко 2002, pp. 123-126] であった。氏は手書きの録文とロシア語訳を提示しているが、録文は于志勇訳で既に修正された「晋」字も含め、内藤氏の録文と完全に一致している。氏は、杜懷寶の赴任時期として、内藤説の679-680年という見解に従うものの、杜懷寶はその直後に碎葉城を離れたと述べ、「杜懷寶碑」は彼が再び碎葉城に赴任した682-709（景龍三）年の間に作成されたという説を提示しているが、残念ながら史料的根拠がない。

次に、薛宗正 [2010, pp. 133-140] が「杜懷寶碑」について検討している。彼もやはり録文作成には手こずっており、内藤氏の録文とルボ=レスニチェンコ氏の録文を提示して議論を進めている。上述したように両氏の録文は同一のはずなのだが、なぜか薛氏は内藤氏の録文と称しながら内藤論文のそれとは一部が異なる録文を提示している。薛氏は、「杜懷寶碑」の作成年代についてははっきりとは論じていないが、杜懷寶は682年の阿史那車薄の乱の際に、反乱軍に包囲された弓月城（現・伊寧）で戦死したと主張しており、それ以前に「杜懷寶碑」が作られたと考えているのだろう。しかし、杜懷寶が弓月城で

戦死した証拠はなく、想像の域を出ていない。

また、内藤・周両氏が問題とした「碎葉鎮圧十姓使」についても、薛氏は独自の見解を述べている。すなわち、「鎮圧」という熟語は近代のもので古代には用例がないため、「碎葉鎮・圧十姓使」と分けて読むべきであり、「圧」は「押」（つかさどる）の意味で使用されており、「碎葉鎮守使・押十姓招慰使」の簡略化した称号であると主張する。しかしながら、「鎮圧」という熟語は『漢語大詞典』（11巻、p. 1365）にも収録されており、そこで引用されている用例が前漢・班固の「西都賦」であることに鑑みれば、唐代では使用されない熟語であると言い切ることにはできない。むしろ、「圧」が「押」と同じ意味で使われるという指摘こそ大いに疑問であり、筆者は薛氏の説に従うことができない。

以上の先行研究は、現地調査が十分に及ばなかった時代のものであり、実質的に録文は内藤論文のそれしか存在していなかった。そのため、議論は肩書きなどの歴史学的に重要な単語に集中していた。もちろん、それ自体重要なことであるが、「杜懷寶碑」の文章全体を見通し、録文を改訂することはこの段階では難しかったと言える。

この状況が改善されたのは、2011年以降に日本隊が現地調査を行い始めた後のことである。筆者は、2011年に川崎建三氏所蔵の拓本を実見する機会を得た。同時に、別の拓本から読解を進めていた吉田豊氏（当時、京都大学教授）より、5行目冒頭の「天」の下は「皇」と読めないか、というご指摘を私信でいただいた。この文字は、上述の通り、周偉洲が文意から「子」と補った文字であったが、残画からは確かに「皇」と読むべき文字であった（詳しくは後述）。この読みは、筆者の録文 [齊藤2016, 2021] に取り入れられているが、検討に使われた拓本は公刊されていない。さらに、2016年に現地調査を行った柿沼 [2019, p. 53] は、同じく5行目が「天皇天后」と読みうる可能性を提示している。¹¹⁾

このように碑文の新読が出始め、その後、録文の検証を行う材料が公開され始めた。まず、城倉他 [2017, pp. 156-157, 173] が現地で碑文の三次元計測と写真撮影を行い、その結果を公開した。この図版は旧来の写真などと比べて非常に文字が鮮明であり、5行目の「皇」や「后」の残画も確認することができる。その後、帝京大学文化財研究所 [2022, p. 44] による拓本写真も公刊され、¹²⁾ここでも同じく「皇」

や「后」の残画が確認できる。「杜懷寶碑」の作製年代を検討するうえで重要な情報となる、この時代特有の君主号を読み取ることができるようになったのは、大きな発見であった。また、碑文の拓本が提供されたことによって、福井 [2020] のような書風を検討する研究も現れていて、「杜懷寶碑」は同時代の書道文化の流れが唐の最西端まで及んだ貴重な作例と評価されている。

このように、近年では「杜懷寶碑」の文字を現地でも再読し、これまで十分読解されていない語句を読み取る研究が進められている。筆者も、その驥尾に付し現地調査を行ったのであった。次章では、筆者の読解を提示する。

「はじめに」で述べたように、筆者は2022年5月24日に、科研基盤研究(S)(シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷－農耕都市空間と遊牧民世界の共存－、JSPS科研費21H04984、代表：山内和也)における調査の一環として、龍谷大学准教授の岩井俊平氏、元・大阪府文化財保護課技師の柘本哲氏とともに、スラブ大学展示室で実見調査を行った¹³⁾。筆者がこの時採った文字識別の方法は、懐中電灯の光を側面から当てて文字を浮かび上がらせる、いわゆる「光拓本」であった。この方法は、様々な角度から光を当てることによって文字の残画を検討しやすい反面、記録として残しにくい。それでも、筆者の検討過程を提示するために、つなぎ合わせた写真と録文を提示する。その後、筆者の録文・和訳と語注を提示する。

II. 「杜懷寶碑」再読

【録文】	【和訳】
1. ^(唐) □□西副都	唐の安西副都
2. ^(護) □碎葉鎮壓	護・碎葉鎮圧
3. 十姓使上柱國	十姓使・上柱国である
4. 杜懷寶上為	杜懷寶は、上は
5. 天皇 ^(天) □后下	天皇・天后両陛下のため、下は
6. 為□□□妣	……亡母や
7. 見存 ^(眷) □属之	存命中の家中の者、ならびに
8. 法界蒼生普	世界中のあらゆる生きもののために、
9. 願平安獲其	(生者が) 平安であることや、彼ら(死者)が冥福を得ることを広く願い、一仏
10. 暝福敬造一佛	
11. ^(二) □菩薩	二菩薩を作りたてまつります。

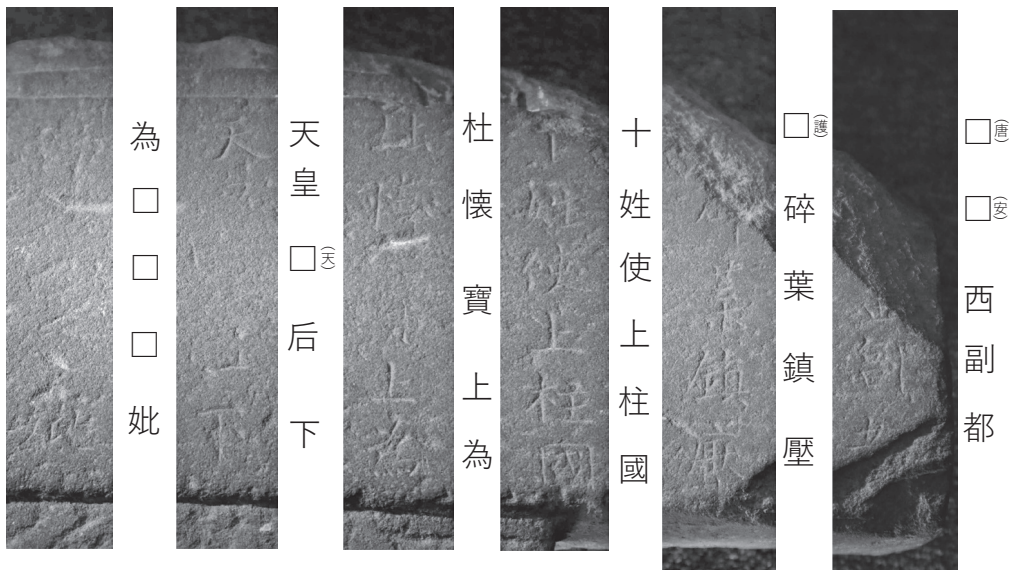


図1 杜懷寶碑 前半部 (筆者撮影)

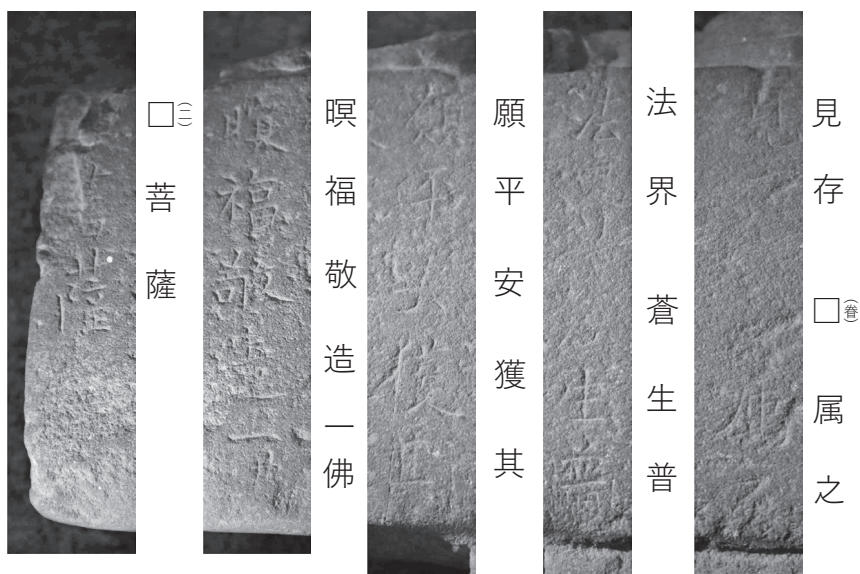


図2 杜懷寶碑 後半部（筆者撮影）

語注

- I.1 唐…完全に破損している部分で、これまでは推測案も出されていなかったが、肩書きの前には王朝名が入ることが多いため「唐」ないし「大唐」とすることを提案する。
- II. 2-3 安西副都護・碎葉鎮圧十姓使・上柱国…杜懷寶が当時帯びていた肩書き。クチャに置かれた安西都護府は大都護府であり、大都護一人（従二品）・副大都護（従三品）・副都護二人（正四品上）などが置かれた [『唐六典』 卷三十「大都護・上都護府官吏」(p. 754)]。大都護は親王の遥領であり、副大都護が現地長官の地位を占めるとされる [伊瀬1955, pp. 308, 312; 桑山（編）1998, pp. 191-192, 森安孝夫担当訳注「節度大使趙君」] が、先行研究であげられている史料では、安西都護府に関わるものは玄宗期以降の記事しかなく [『唐会要』 卷七八「親王遥領節度使」(p. 1697)]、高宗期作成と見られる本碑の時点では詳細は不明である。同時に帯びている「碎葉鎮圧十姓使」に関しては、682年に発生した阿史那車薄の乱を平定する際に帯びたものとする説 [内藤1997, p. 157] や、西突厥全体を統御することを目的としたものとする説 [周偉洲2000, p. 388]、「圧」の字は「押」（つかさどる）の意味であり、「碎葉鎮・圧十姓使」と読むとする説 [薛宗正2010, pp. 136-137] などが出されている（詳しくは前章を参照）。
- I.4 杜懷寶…「寶」の字は残画が非常に薄く、確実とは言えない。しかし、最下部のはねだけはつき

り見えており、「杜懷寶」の「寶」の下部、「貝」部分の異体字が見えていると考えて新たに釈読した【図3】。とはいえ、当然、これまでの先行研究でも文字の存在が推測されていた字である。杜懷寶は、上述したとおり碎葉に赴任していた人物である。

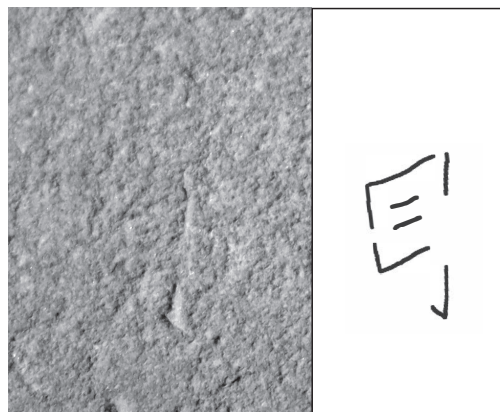


図3 「寶」原碑写真と残画の模写

- I.5 天皇天后…「皇」字は先行研究では読まれておらず、「子」と推測する研究 [周偉洲2000, p. 384] もあり、筆者も当初はそれに従っていた [齊藤2016, p. 87]。しかし、2015年に吉田豊氏より「皇」と読むアイデアをご提案いただいたため、後に修正している [齊藤2021, p. 76]。今回、実見した結果でも、「天」の字が明瞭に判読でき、「皇」の字の上部を判読することができた【図4】。「天皇」とは、『旧唐書』 卷五「高宗紀」 [p. 99] に、「(咸亨五年八月) 皇帝稱天皇、皇后稱天后

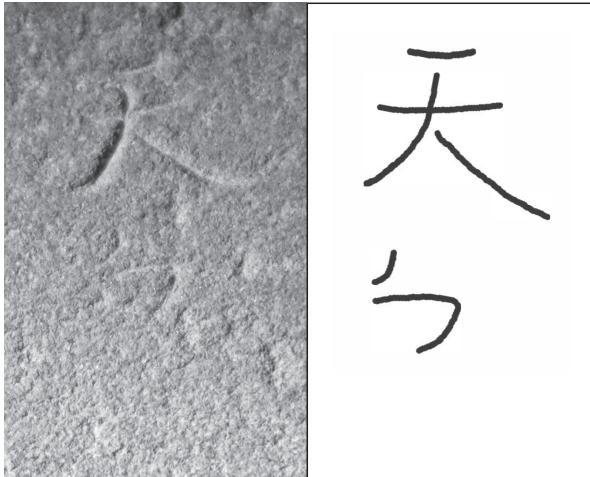


図4 「天皇」原碑写真と残画の模写

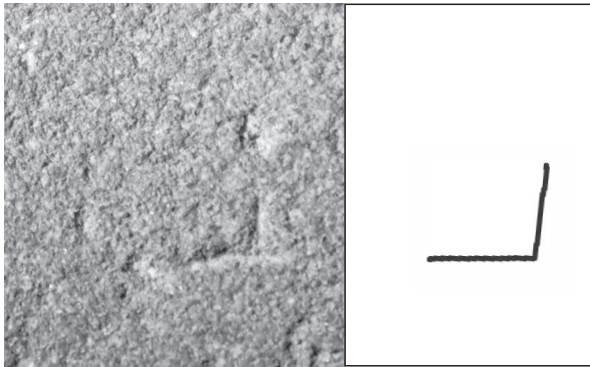


図5 「后」原碑写真と残画の模写

(咸亨五(674)年八月に、皇帝高宗は天皇と称し、皇后武則天は天后と称することとした)」とあるように、674年以降に称された高宗の称号であり、同時に皇后であった武則天の称号も「天后」に変更された。周知の通り、高宗晩年に武則天の権力は高宗をしのぐほどになり、「二聖」と称されるほどであった。

造像銘では、廻向の対象として時の皇帝を第一にあげる場合が多く、4行目末から5行目にかけては、仏像を作成した功德が、君主たる天皇・天后に廻向されることを願っているのである。このような君主を奉為対象とする祈願文は、既に北朝期から存在していることが指摘されている[佐藤1977, pp. 28-35]し、唐代の祈願文でも一般的に見られるものである。そして、高宗期においては、皇帝と並んで武則天も併記されたのであり、同時代の龍門石窟の造像銘では、「天皇天后」と並び称している例が複数存在する。

たとえば、675(上元二)年作成の龍門2537[『彙

録』, p. 550]では、「奉為天皇天后・太子諸王・遠劫師僧・七代父母」とあり、679(儀鳳四)年の龍門2560[『彙録』, p. 556]では、「奉為天皇天后・殿下諸王・文武百官」という表現がある。そうした視点から改めて「杜懷寶碑」を見直せば、「后」の右下の「口」の部分と思われる残画が見てとれる【図5】。そのため、柿沼[2019, p. 53]が可能性を提示したように、「天后」と読むことに問題はない。

「天皇天后」号から素直に考えれば、「杜懷寶碑」の作成年代はこの称号が使用された674-683年の間ということになる。齊藤[2021, p. 78]では、さらに限定して682-684(文明元/光宅元)年の間に作成されたと指摘した。上限を682年としたのは、「十姓」という呼称が登場するのは682年に発生した阿史那車薄の乱以降であるという、内藤[1997, p. 156]に従ったためである。下限を684年としたのは、高宗が683(弘道元)年に死去した後、辺境の碎葉鎮城までその情報が届く時間差を考慮したためである。

しかしながら、684年を下限とすることには問題もある。龍門石窟の造像銘では、武周期に入った692(如意元)年閏五月五日造の龍門0706[『彙録』, p. 162]でも奉為対象として「天皇天后」が挙げられている。さらに、礪波[1986(1982), pp. 442-443]が河南省の「響堂山石窟」の造像銘で示した例では、699(聖曆二)年から724(開元十二)年にいたるまで、「天皇天后」ないし「天皇」の表現が見え、必ずしも高宗在位中に限定することはできないようでもある。それゆえ、柿沼[2019, p. 53]は、「天皇天后」という表現を年代特定の証拠として用いることに慎重な態度を取っている。

とはいえ、礪波の示した例では、祈願文が一族中で代々再利用された結果、表現が時代錯誤となってしまったと解釈されており、高宗死後も「二聖」への廻向が繰り返されていた、とは解釈されていない。おそらく、龍門0706も同様の再利用である可能性がある。「杜懷寶碑」の場合で言えば、前稿で指摘したように[齊藤2021, p. 81, n. 34]、安西副都護まで務めた人物が造像銘をあえて再利用して奉納する可能性は低い。また、高宗の死去と同時に天后は皇太后に改められた[『旧唐書』卷六「則天皇后紀」(p. 116)]はずで、当時、

君主に等しかった武則天の尊称を、一般民衆ならともかく高官が旧来のまま使用することも考えにくい。やはり「杜懷寶碑」は高宗在位中か、683年の高宗死後間もない時期、遅くとも684年までには作成されたと考えるべきだろう。

- 1.6 為□□□妣… 1文字目の「為」は新読箇所。この字は残画しか残っていないが、4行目末尾の「為」と字形が類似しており、4行目の「上為」に対応する「下為」となることが文脈上も期待され、すでに先行研究でも予想はされていた〔周偉洲2000, p. 384〕。すなわち、社会の上層にいる君主と並び、社会の下層にいる身近な親類縁者に対する功德の回向について述べられると想定されるのである。このような、「上為」・「下為」に奉為対象が分かれる造像銘の表現は唐代では一般的である。たとえば、顕慶五年（660）の龍門1426〔『彙録』, pp. 322-323〕では、「上為皇帝諸王、下為父母眷属、敬造觀世音菩薩一區（上には皇帝諸王のため、下には父母や家中の者のため、觀世音菩薩一体を作りたてまつります）」という一文がある。
- 1.7 見存眷属之… この行はこれまで「見□□□使之」と読まれており、本稿で改めた箇所である。本行の読みを改めるきっかけとなったのは、これまで「使」と誤読されていた4文字目の「属」を新たに読み取ることができたことだった【図6】。この写真でも文字は明確とは言えないが、右下部分に角やはねが見えることが確認できることから、「使」とは異なる文字であることはあきらかである。「尸」こそ摩耗して見えないが、それ以外の筆画から「属」と読む蓋然性が高い。「属」が新たに読み取れたことにより、本行1文字目の「見」が生きてくる。2文字目の上部にも十字型の残画が見えることも考慮に入れば、同時代の造像銘の奉為対象としてよく見られる「見存眷属」がここに入るものと想定することができる。

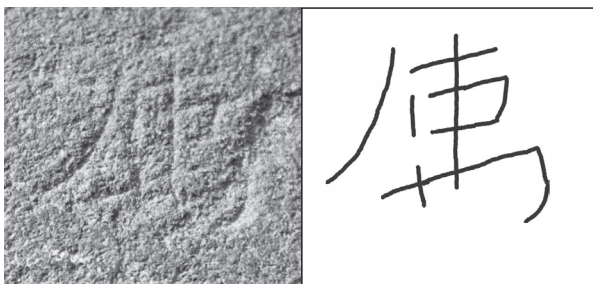


図6 「属」原碑写真と残画の模写

「見存眷属」とは、たとえば、顕慶五（660）年の龍門1423〔『彙録』, p. 322〕では、「所願、九代父母往生浄土、見存眷属皆得平安（願いますのは、九代前までの父母が浄土に往生し、存命中の家中の者がみな平安を得ることです）」とあり、既に死去した先祖の冥福を祈るばかりでなく、存命中の人々の安寧を祈る文言の中に「見存眷属」という表現が現れている。この龍門1423で、死者→生者の順で安寧が祈願されていることは、「杜懷寶碑」の6行目末尾に亡き母を表す「妣」という表現があることとも対応する。すなわち、「杜懷寶碑」も龍門1423と同様に、死者→生者の順で回向の祈願が行われているのである。「杜懷寶碑」の場合、さらにその前に君主である「天皇天后」が記され、奉為対象は君主→死者→生者の順番になる。これも龍門石窟の造像銘に類例を見て取ることができる。たとえば、龍門1422〔『彙録』, p. 321〕には次のようにある。短いので全文を以下に提示する。「□□河東縣〔弟〕子董法素、〔為〕皇帝〔陛下〕下・先亡并見存家口、敬造彌陀像一龕（□□河東県の仏弟子である董法素が、皇帝陛下や死去したならびに存命中の家中の者のために、阿弥陀像一龕を作りたてまつります）。」

なお、本行末の「之」字は柿沼〔2019, p. 53〕によって新たに提案された読みである。この字は解釈に苦しむところだが、実見してもにわかに誤読とも判断できなかった。ただし、確実にこの字だとも断定できなかったため、今後新たな釈読が行われる可能性は十分にある。現時点では代案もないため、先行研究の意見を尊重し、並列の接続詞と解釈して「ならびに」と翻訳した。

- 1.8 法界蒼生、普… はじめの4文字は「法界□生」と読まれていたが、「蒼」の下半分の「口」とその左側の払いが見えているため、新たに読み取っ

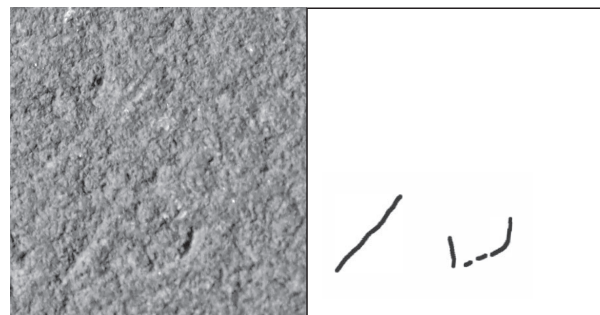


図7 「蒼」原碑写真と残画の模写

た【図7】。「法界」は全世界の意味。「蒼生」は「倉生」とも書き、人間をはじめとする全てのこの世に生きとし生けるものの意味である。この四字句は奉為対象として北朝期から唐代まで広く見られるものであり、わずかな残画のみで「蒼」と判断することができたのは、「法界蒼生」という用例が非常に多いためである。さて、この部分は、君主→死者→生者の順番で回向されてきた功德が、最終的にあらゆる生きものに回向されることを願っている箇所である。君主は含まれないが、死者→生者→全生命の順で回向されている造像銘として、龍門1366 [『彙録』, p. 309] を挙げておく。「雍州萬年縣孟懷素及郭大娘、為七代父母・見存父母・法界倉生、敬造[像]一區、供養(雍州萬年県の孟懷素と郭大娘が、7代前までの先祖と存命中の父母、あらゆる生きもののために、仏像(?) 一体を作りたてまつり、供養いたします)。」なお、本行最終字の「普」を内藤 [1997] とルボ=レスニチェンコ [Лубо-Лесниченко 2002] は「晋」に作るが、後に発表された拓本・スキャン写真でも、実見した結果でも、問題なく「普」と読める。両者以外の録文は、すべて「晋」字を「普」字に改めている。

1.9 平安…京都大学人文科学研究所准教授の倉本尚徳氏から2022年6月の私信で御教示いただいたところによれば、「平安」は生者に対する祈願であり、次行の「暝福」が死者に対する祈願ではないかとのことである。同時代の実際の用例では、例えば既に引用した龍門1423 [『彙録』, p. 322] では、「所願、九代父母往生浄土、見存眷屬皆得平安(願いますのは、九代前までの父母が浄土に往生し、存命中の家中の者がみな平安を得ることです)」とあり、まさに生者だけに「平安」が祈願されている。「杜懷寶碑」の場合、極めて読み取りにくい構成にはなっているものの、倉本氏の解釈に従って翻訳を行った。倉本氏には、この場を借りて御礼申し上げたい。

1.10 暝福…「冥福」と同じ、死後の幸福の意味で解釈した。今のところ、「暝福」の用例はほかに見つけることができていないが、文脈から考えて意味は確実である。

1.11 二菩薩…柿沼 [2019, p. 53] は、従来「二」と読まれていた文字を、実見の結果「一菩薩」としか読めなかった」としてあえて「一」に修正し

ている。そのため、筆者も十分時間をかけて実見を試みたが、その結果を正直に述べれば、文字の残画がほとんど残っておらず「どちらとも判別できない」であった。一方、美術史の方面からは、台座の形から一仏二菩薩の三尊像であったことに問題ないとする指摘 [森2020, p. 174, n. 22] があるため、本稿では従来説の「二」に与することとした。

以上のように、筆者が新たに読み取った字句から、「杜懷寶碑」は、仏像を作った功德を、君主→死者→生者→全生命の順で廻向することを願った造像銘であることが明白となった。そして、同様の内容・語彙を持った造像銘が、同時代の龍門石窟に多く存在していることから、「杜懷寶碑」の文章は、中原の仏教から見て極めて典型的な文章を伴った造像銘であることが指摘できることとなった。このことは「杜懷寶碑」が、同時代の中原で作成された造像銘を作成した人々と、同程度の仏教的語彙や知識を備えた人物によって撰文されたことを示している。すなわち、中央アジアの現地にいた人々ではなく、杜懷寶自身か、中原からやってきた僧侶などが撰文を担ったと推測されるのである。これは、上述した福井 [2020, p. 156] が指摘したように、「杜懷寶碑」が同時代の中国本土における書風と軌を一にしているという点とも合致する。「杜懷寶碑」は、中原の中国文化が中央アジアにそのまま移植された結果生まれたものなのである。そのように考えたとき、武周によって同地に建立されたという仏教寺院、大雲寺との関係が想起される。次節では「杜懷寶碑」と大雲寺の関係について論じてみたい。

Ⅲ. 「杜懷寶碑」と大雲寺

碎葉城の大雲寺は、751年に当地を訪れた杜環¹⁵⁾がその存在を報告している寺院である。

『通典』卷一九三「辺防九石国条引 杜環『経行記』」(p. 5275)

又有碎葉城、天寶七年、北庭節度使王正見薄伐、¹⁶⁾城壁摧毀、邑居零落。昔交河公主所居止之處。建大雲寺、猶存。

さらに碎葉城(アク・ベシム遺跡)があり、天宝七(748)年に北庭節度使の王正見が侵攻し

たので、城壁は破壊し尽くされ、集落は衰退した。かつて交河公主が留めおかれていた所である。大雲寺が建てられており、現存している。

このように、大雲寺なる寺院が碎葉城にあり、751年の段階ではまだ残存していた。大雲寺とは、武則天が690年に全国に設置した官営の寺院である。

『資治通鑑』卷二〇四「則天后 天授元(690)年条」(p. 6469)

〔十月〕壬申、敕兩京諸州各置大雲寺一區、藏大雲經、使僧升高座講解、其撰疏僧雲宣等九人皆賜爵縣公、仍賜紫袈裟・銀龜袋。

十月二十九日、制勅をくだし、兩京（＝長安・洛陽）や諸州にそれぞれひとつの大雲寺を置き、『大雲經』を所藏させ、僧侶に高座で講論させ、その經の疏を撰述した僧侶である大雲寺の宣政等¹⁷⁾9人には皆県公の爵位を賜与し、さらに紫の袈裟と亀符を入れた銀の装飾のある袋を賜与した。

このように、武則天が周王朝を建国した翌月に、兩京をはじめとして全国に大雲寺が設置された¹⁸⁾。そのうちのひとつは、遠く中央アジアの碎葉鎮城にまで設置されたのである。

中央アジアにおける大雲寺は、アク・ベシム遺跡、すなわち碎葉鎮城だけに置かれたわけではない。開元十五(727)年にタリム盆地のオアシスを通過した仏僧の慧超は、クチャとカシュガルにも大雲寺が存在しており、それらの寺院の僧侶は中国本土から来ていたことを記録している。

『慧超往五天竺国伝』〔桑山(編)1998, pp. 229-230]¹⁹⁾
開元十五年十一月上旬、至安西、于時節度大使趙君。且於安西、有兩所漢僧住持、行大乘法、不食肉也。大雲寺主秀行善能講說。先是、京中七寶臺寺僧。大雲寺都維那名義超、善解律藏。舊是京中莊嚴寺僧也。大雲寺上座、名明暉、大有行業。亦是京中僧。此等僧、大好住持甚有道心、樂崇功德。…(中略)…疎勒亦有漢大雲寺。有一漢僧住持、即是嶠州人士。開元十五年十一月上旬、安西(クチャ)に至ったが、その時の節度使は趙頤貞であった。なお、安西には中国僧の住持している寺院が二ヶ所あり、大乘の法を行い、肉を食べないでいる。(その一つの)大雲

寺の寺主は秀行という人で、講義説法がうまい。もとは京中七寶臺寺の僧であった。大雲寺の都維那は義超といい、律をよく知っている。もとは京中莊嚴寺の僧であった。大雲寺の上座は明暉といい、おおいに徳業がある。やはり長安の僧であった。これらの僧たちはしっかりと仏法を護持していて、帰依の心も大変に厚い。功德をつむのに熱心である。…(中略)…疎勒にもまた唐の大雲寺がある。一人の中国僧が護持していて、嶠州(現在の甘肅省定西市岷県)の人である。

クチャ・カシュガルともに同じ中央アジアの安西四鎮であることから、少なくとも安西四鎮のひとつに数えられていた頃の碎葉鎮城でも、大雲寺は中国本土から来た漢人の僧侶によって運営されていた可能性は高いだろう。

では、アク・ベシム遺跡のどこに大雲寺があったのか。この遺跡に大雲寺跡の候補となる遺構は3箇所ある。すなわち、ベルンシュタムが発掘し、第2シャフリスタン内部に位置する第0仏教寺院(AKB-0)、クズラソフが発掘した城外の第1仏教寺院(AKB-1)、ズィヤブリンが発掘した同じく城外の第2仏教寺院(AKB-18)である【図8】。クローソン[Clouston 1961, p. 8; 山内/吉田2021, p. 93]は、第1仏教寺院が大雲寺であると推測した。張広達[2008(1979), pp. 18-21]もまた第1仏教寺院を大雲寺と見なした。その理由は、建造年代の一致とともに、弥勒仏と釈迦仏が出土していることから、弥勒の下生と自称した武則天と連想させたことによる。この説は、フォルテ[Forste 1994, p. 51]による賛同を得たものの、加藤[1997, p. 159]は、城壁外にあることと、中央アジアの要素が強すぎることを理由に否定的な見解を出している。

現在、大雲寺の最も有力な候補として、第2シャフリスタン城壁内に位置する第0仏教寺院が挙げられる。この遺構からは他の二遺構と異なり中国式の仏像や唐代の瓦が出土していること[川崎/山内2020, pp. 217-218]に加え、唐代中原の寺院プランとの類似や、唐代に建築された城郭である、第2シャフリスタン西南壁との軸線の一致が指摘されている[城倉2021, pp. 7-10]。この第0仏教寺院が大雲寺だとすれば、「杜懷寶碑」との関係はどのようなのだろうか。

「杜懷寶碑」が発見された場所は明らかではないが、最初の報告をしたスプルネンコが「杜懷寶碑」

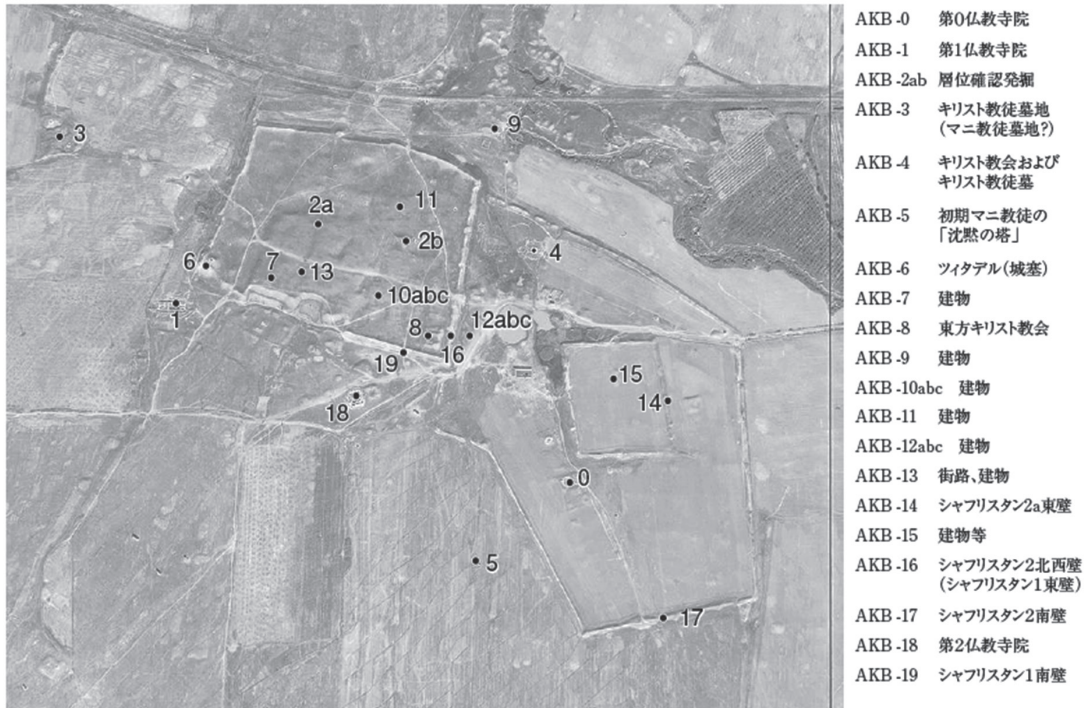


図8 アク・ベシム遺跡の1966年航空写真とこれまでの発掘地点 [望月他 2020, p. 63]

と第2シャフリスタンを結びつけているのは示唆的である。あるいは、その周辺から発見されたのかもしれない。そのことをいったんおいたとしても、アク・ベシム遺跡で中国式の寺院が第0仏教寺院だけだとすれば、中原文化を持ち込んだ漢文で書かれている「杜懷寶碑」が、そこに奉納された²⁰⁾と考えるのは自然であろう。とはいえ、ここで思い出さなければならぬのは、「杜懷寶碑」が作られたのは682-684年である可能性が高いということである。これは、言うまでもなく大雲寺設置の詔勅が出された690年よりも早い。

とすれば、大雲寺設置以前から、第2シャフリスタンには何らかの中国式の仏教施設が存在していたことになる。そう考えれば、その仏教施設とは、碎葉鎮城の建設とともに唐によって設置されたもの、あるいは、たとえそれ以前からあったとしても、碎葉鎮城の建設とともに中国風に改修されたものだっただろうという結論にいたる。

では、その仏教施設とは、大雲寺とはまた別に存在していたものだったのだろうか。いや、そのように考える必要はあるまい。なぜなら、長安の大雲寺について記録した、以下の史料を我々は知っているからである。

『長安志』 卷十「唐京城四 懷遠坊」 [pp. 337-338]

東南隅、大雲經寺。本名光明寺。隋開皇四年、文帝爲沙門法經所立。時有延興寺僧曇延、因隋文帝賜以蠟燭、自然發焰、隋文帝奇之、將改所住寺爲光明寺。曇延請更立寺、以廣其教、時此寺未制名、因以名焉。武太后初幸此寺、沙門宣政進大雲經、經中有女主之符、因改爲大雲經寺、遂令天下每州置一大雲經寺。此寺當中寶閣、崇百尺、時人謂之七寶臺。東南の隅に大雲經寺がある。元々の名前は光明寺である。隋代の開皇四(584)年に、文帝が沙門の法經のために建てた寺である。おりしも、延興寺の僧侶に曇延というものがいて、隋の文帝が蠟燭を下賜したところ、自然に火がついたので、隋の文帝が不思議なことであると見なしたことから、(曇延が)住んでいる寺を光明寺に改めようとした。曇延はさらに寺を建て、彼の教えを広めたいと請願すると、ちょうど、この(法經の)寺はまだ名称を制定していなかったため、そこで(この寺を光明寺と)名付けたのである。武則天が初めてこの寺に行幸し、沙門の宣政が『大雲經』を進呈したところ、經の文中に淨光天女の授記があったので、そこで(光明寺を)大雲經寺と改め、そして全国の全ての州にひとつの大雲經寺を置かせた。この寺の中心の宝閣は、百尺の高さがあり、当時の人々はこれを七宝台と呼んでいた。

ここには、長安には隋代に建てられた光明寺があり、それが後に大雲（²¹⁾経）寺に改名したとある。改名の理由として、光明寺の沙門である宣政が、武則天に『大雲経』を進呈したことがある。ここでいう『大雲経』とは、フォルテ [1984] によれば北涼の曇無讖が訳出した『大方等夢想経』のことであるが、宣政等が進呈したのはその第四巻に付された「疏」、『大雲経神皇授記疏』であるという。『大雲経』の第四巻には浄光天女に対する授記が書かれており、それに「疏」を付けることで武則天が浄光天女の下生であるという言説を広め、来たるべき唐周革命へのお膳立てに利用されたのだという。光明寺が大雲寺に改名されたのは、その報償と考えられる。

とすれば、新たに寺院を建てるのではなく、寺の名称だけ改めて、大雲寺を置いたことにした、ということである。都の長安でさえそうなのだから、他の州でも事情は同じだっただろう。²²⁾まして、遠く中央アジアの軍事拠点である碎葉にまで、わざわざ新しい寺を建てたとはとても思えない。すなわち、「杜懷寶碑」が奉納された仏教施設とは、碎葉鎮城の建設と同時期に建設あるいは改修された、大雲寺の前身に当たる寺院であり、その後、名称を変更して大雲寺と名乗ることとなったと考えられる。ただし、大雲寺設置の命令が下された690年段階では、碎葉城は吐蕃によって占領されており、唐は692年に奪還に成功した [齊藤2021, p. 73]。それゆえ、大雲寺への改名も692年の奪還時に行われた、と考えるべきだろう。

この大雲寺の前身となる寺院は、「杜懷寶碑」が奉納されるにふさわしい、中国式的なものだったと考えられる。中央アジアに移植された中原の仏教文化が「杜懷寶碑」を生み、大雲寺へと継承されて少なくとも8世紀半ばまでは残り続けたのである。

おわりに

本稿では、現地調査の結果に基づき、アク・ベシム遺跡出土の「杜懷寶碑」を再読した。その結果、「杜懷寶碑」は、君主→近親の故人→存命の家人→全生命、の順で三尊像作成の功德を回向したいという内容の造像銘であることが明確となった。そして、その文章構成や使われている語彙は、中原で同時代に作成された造像銘と共通する典型的なものであることから、679年に王方翼が碎葉鎮城を築いた後

に、杜懷寶自身もしくは中原からやって来た僧侶などによって、「杜懷寶碑」が作成されたと考えられることを指摘した。また、「杜懷寶碑」は682年から684年の間に作られた可能性が高いことから、「杜懷寶碑」を作成した人物は、碎葉鎮城の建設に伴って建設ないし改修された城内の仏教施設に、中原からやって来たのであり、その仏教施設が692年に吐蕃から碎葉城を奪還した際に大雲寺と改名され、751年に当地を訪れた杜環によって報告されたと考えられることを指摘した。

以上の検討により、碎葉鎮城には創建直後から中国式の仏教施設が存在していたと結論付けられる。唐軍は駐屯地に自らの仏教施設を備えることで威光を示そうと考えたのではなかろうか。今後の発掘調査の進展で新たな事実が明らかになることを切に願ひ、本稿の締めくくりとしたい。

註

- 1) 文献史料を用いた碎葉の歴史研究については、齊藤 [2021; 2023]・柿沼 [2019] とそれらに引用された参考文献を参照のこと。
- 2) ベルンシュタムの発掘調査については、川崎/山内 [2020] を参照のこと。
- 3) クズラソフの発掘ならびに学説については山内 [2023] を参照のこと。
- 4) 本論文の日本語訳注として山内/吉田 [2021] がある。
- 5) 以下、『彙録』と略称する。本稿引用の造像銘で「龍門」で始まる番号のものは、『彙録』に所収されたものである。
- 6) [] や○、文字の間隔などは、内藤氏の録文のままにしてある。文中で明言されていないが、[] は意味から推定された文字を、○は残画が残っているが判読できない文字を表しているものと推測される。
- 7) 『文苑英華』『全唐文』は「大」とする。どちらでも意味を取ることができるが、とりあえず『張説集校注』に従う。
- 8) 『文苑英華』に従い「于」とする。『張説集校注』は「汗」とするが、意味をとることができない。
- 9) 松田 [1970 (1930), pp. 336-338] による地理比定に従う。
- 10) 和訳を見る限り、内藤氏もこの碑文が造像銘であることを理解していたに違いない。ただ明言しなかっただけである。
- 11) ただし、この読みは帝京大学文化財研究所教授の山内和也氏の助言によるという [柿沼2019, pp. 56, 58, n. 76]。
- 12) 公開されたのは2022年だが、調査日誌 [帝京大学文化財研究所2022, p. 204] によれば、2016年9月1日に採拓したとのことである。
- 13) 調査に際しては、同大学のヴァシリー・ウラジミロビッ

- チВасилий Владимирович氏に多大なご厚情を賜り、円滑に調査を行うことができた。この場を借りて御礼を申し上げます。
- 14) 「蒼」の字は下端部しか残画が残っていないが、「倉」と読むと文字間の余白が広すぎるため、「蒼」と読むべきであろう。
 - 15) 杜環は『通典』の編者である杜佑の親族で、いわゆる「タラス河畔の戦い」で捕虜となり、クーファ・バスラを経由して762年頃（宝応初年）帰国した人物である [cf. 前嶋1982, pp. 62-63]。
 - 16) 中華書局標点本では、前の交河公主の話題と、後の大雲寺の話題は読点でつながっており、「交河公主のいたところに大雲寺を建てた」と解釈しているように見える。しかし、前後は年代が異なる別の話題であり、句点で切るべきとするフォルテ [Forte 1994, pp. 52-53] に従う。この読み方をするので、必ずしも交河公主と大雲寺を結びつける必要がなくなる。
 - 17) 「雲宣」なる人物は知られていないことから、「大雲宣政」、すなわち「大雲寺の僧侶・宣政」の誤伝であるとするフォルテ [Forte 2005 (1976), pp. 98-99; フォルテ1984, p. 187] の説に従う。
 - 18) 『旧唐書』の本紀は『大雲経』（実は『大雲経疏』）が上進された載初元（690）年七月に大雲寺の設置の記事をかけているが、『資治通鑑』の情報の正確さを指摘するフォルテ [Forte 2005 (1976), pp. 9-13; フォルテ1984, pp. 190-191] に従う。
 - 19) 和訳は同書のものに基づきつつ、必要と判断した語句を増補している。語句の詳しい解説は、同書の語注を参照のこと。
 - 20) もうひとつ、アク・ベシム遺跡から出土した漢文碑文は第2仏教寺院から出土したとされている [Любо-Лесниченко 2002, p. 119]。しかし、帝京大学教授の山内和也氏によると、現地で複数人から聞き取りを行ったが、この碑文の出土地点を正確に把握している人物はいなかったという。それゆえ、この碑文も第2シャフリスタンから出土した可能性は十分にある。
 - 21) 9世紀半ば成立の『歴代名画記』巻三 [p. 56] には、長安に隋代建設の「七宝塔」を有する「大雲寺」があるとされている。微妙な名称の差異があるが、『長安志』の大雲経寺と『歴代名画記』の大雲寺は同じ寺院を指していると考えて問題ない。
 - 22) フォルテ [1984, p. 185; Forte 1998 (1992), pp. 223, 225] もまた、大雲寺の多くが既存の寺院の名称だけ変更したと推測している。

参考文献

◎漢文文献

- 熊飛（校注）『張説集校注』（中国古典文学基本叢書）中華書局、2013。
陳仲夫（点校）『唐六典』中華書局、1992。

劉景龍／李玉昆（主編）『龍門石窟碑刻題記彙録』中國大百科全書出版社、1998。

『文苑英華』／『全唐文』＝中華書局影印本。

『旧唐書』／『資治通鑑』（旧版）／『通典』＝中華書局標点本。

『唐会要』＝上海古籍出版社標点本。

『長安志』＝三秦出版社標点本。

『歴代名画記』＝浙江人民美術出版社標点本。

◎欧文献

Бартольд, В.В. 1966: Отчет о поездке в Среднюю Азию с научною целью 1893-1894 гг. *Академик В.В.Бартольд сочинения, Том IV: Работы по археологии, нумизматике, эпиграфике и этнографии*, Издательство << НАУКА >>, Москва, pp. 20-91. (1st pub.: Записки Императорской Академии наук, Отделение истории и филологии, сер. VIII, 1-4, 1897)

Бернштам, А.Н. 1950: Б. Баласагун (развалины Ак-пешин). *Труды семиреченской археологической экспедиции "Чуйская долина"* (Материалы и исследования по археологии СССР, no. 14), Издательство Академии наук СССР, Москва / Ленинград, pp. 47-55.

Clauson, G. 1961: Ak Beshim—Suyab. *Journal of the Royal Asiatic Society* 1961-1/2, pp. 1-13.

Forte, A. 1994: An Ancient Chinese Monastery Excavated in Kirgiziya. *Central Asiatic Journal* 38-1, pp. 41-57.

——— 1998: Chinese State Monasteries in the Seventh and Eighth Centuries. 桑山正進（編）『慧超往五天竺国伝研究』（改訂第二刷），臨川書店，pp. 213-258。（初出：同書初刷，1992）

——— 2005: *Political Propaganda and Ideology in China at the End of the Seventh Century: Inquiry into the Nature, Authors and Function of the Dunhuang Document S.6502 Followed by an Annotated Translation*, 2nd ed., Italian School of East Asian Studies, Kyoto. (1st ed., Istituto universitario orientale, Seminario di studi asiatici, Napoli, 1976)

Горячева, В. Д. / Перегдова, С. Я. 1996: Буддийские памятники Киргизии. *Вестник Древней Истории* 46-2, pp. 167-189.

Кызласов, Л.Р. 1959: Археологические исследования на городище Ак-Бешим в 1953-1954 гг. Дебеца, Г. Ф. (ed.) *Труды Киргизской комплексной археолого-этнографической экспедиции II*, Москва, pp. 155-241.

Любо-Лесниченко, Е. И. 2002: Сведения китайских письменных источников о Суябе (городище Ак-Бешим). In: *Суяб: Ак-Бешим*, Санкт-Петербург, pp. 115-127.

◎和文文献

伊瀬仙太郎 1955：『中国西域経営史研究』日本学術振興会。

柿沼陽平 2019：「唐代碎葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』18, pp. 43-59。

加藤九祚 1997：「セミレチエの仏教遺跡」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究（シルクロード学研究 Vol. 4）』, pp. 121-184。

- 川崎建三／山内和也 2020：「ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡シャフリスタン2の発掘調査——1939年、1940年——」『帝京大学文化財研究所研究報告』19, pp. 215-245.
- 桑山正進（編）1998：『慧超往五天竺国伝研究』臨川書店、改訂第2刷。
- 齊藤茂雄 2016：「碎葉とアク・ベシム——7世紀から8世紀における天山西部の歴史的展開——」独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター（編集・発行）『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究 アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡——2011～2014年度——』, pp. 81-92.
- 2021：「碎葉とアクベシム——7世紀から8世紀前半における天山南部の歴史展開——（増訂版）」『帝京大学文化財研究所研究報告』20, pp. 69-83.
- 2023：「文献史料から見た碎葉城」『帝京大学文化財研究所研究報告』21（2022）, pp. 25-37.
- 佐藤智水 1977：「北朝造像銘考」『史学雑誌』86-10, pp. 1-47.
- 城倉正祥 2021：「唐碎葉城の歴史的位罫——都城の空間構造と瓦の製作技法に注目して——」『唐代都城の空間構造とその展開』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所, pp. 1-60.
- 城倉正祥／山藤正敏／ナワビ麻痺／伝田郁夫／山内和也／バキット＝アマンバエヴァ 2017：「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015年秋期）調査出土遺物の研究——土器・埴・杜懷寶碑編——」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』5, pp. 145-175.
- 帝京大学文化財研究所 2022：『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』, 帝京大学文化財研究所／キルギス共和国国立科学アカデミー。
- 礪波護 1986：「唐中期の仏教と国家」『唐代政治社会史研究』同朋舎, pp. 397-477.（初出：『中国中世の宗教と文化』京都大学人文科学研究所, 1982）
- 内藤みどり 1997：「アクベシム発見の杜懷寶碑について」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究（シルクロード学研究 Vol. 4）』, pp. 151-184.
- 林俊雄 1996：「天山北麓の仏教遺跡」『ダルヴェルジンテバDT25 1989～1993発掘調査報告』ウズベク共和国文化省ハムザ記念芸術学研究所／創価大学シルクロード学研究センター, pp. 154-178.
- フォルテ, アントニーノ 1984：「『大雲経疏』をめぐって」牧田諦亮／福井文雅（編）『敦煌と中国仏教』（講座敦煌7）大東出版社, pp. 173-206.
- 福井淳哉 2020：「『杜懷寶碑』の書風に関する書道史的考察——時代性を中心として——」『帝京大学文化財研究所研究報告』19, pp. 149-157.
- 前嶋信次 1982：「杜環とアル・クーファ——中国古文献に現れた西アジア事情の研究——」『シルクロード史上の群像——東西文化交流の諸相——』誠文堂新光社, pp. 61-78.
- 松田壽男 1970：「弓月についての考」『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』早稲田大学出版部, pp. 324-356.（初出：『東洋学報』18-4, 1930）
- 望月秀和／山内和也／バキット・アマンバエヴァ 2020：「空中写真によるアク・ベシム遺跡（スイヤブ）の解析」『帝京大学文化財研究所研究報告』19, pp. 61-126.
- 森美智代 2020：「キルギス共和国チュー川流域出土の唐風石造仏教彫刻」『帝京大学文化財研究所研究報告』19, pp. 159-175.
- 山内和也 2023：「クズラソフによるアク・ベシム遺跡の発掘——層序発掘区と第1仏教寺院——」『帝京大学文化財研究所研究報告』21（2022）, pp. 157-252.
- 山内和也／吉田豊 2021：「ジェラルド・クロウソン著「アク・ベシム遺跡——スイヤブ」」『帝京大学文化財研究所研究報告』20, pp. 85-98.
- 吉田豊 2021：「補説：クズラソフKyzlasovが発掘したコインの年代と歴史的背景に関するクロウソンClausonの解釈の問題点とコインに関する研究のその後の展開」『帝京大学文化財研究所研究報告』20, pp. 99-102.
- ◎中文文献
- 内藤みどり／于志勇（編訳）1998：「吉爾吉斯坦發現杜懷寶碑銘」『新疆文物』1998-2, pp. 102-108.
- 薛宗正 2010：「金山都護府置廢」『北庭歴史文化研究——伊・西・庭三州及唐属西突厥左廂部落』上海古籍出版社, pp. 126-160.
- 張広達 2008：「碎葉城今地考」『文書・典籍与西域史地』広西師範大学出版社, pp. 1-24.（初出：『北京大学学报』1979-5, 1979）
- 周偉洲 2000：「吉爾吉斯坦阿克別希姆遺址出土唐杜懷寶造像題銘考」『唐研究』6, pp. 383-394.